長期臨床実習中における学生の心理的要因
積極的に質問するためには

藤平保茂[1)]，久利彩子[1)]，小杏武陛[1)]，古井　透[1)]

1）大阪河﨑リハビリテーション大学

キーワード：Active learning・臨床実習・積極性

はじめに

臨床実習（以下，実習）は，理学療法士を目指す学生にとって臨床での理学療法を経験できる重要な学外授業であり，810 時間以上（18 単位）を受けなければならない必須科目である[1)]．実習に臨む学生は，臨床実習指導者（以下，指導者）の指導のもと，さまざまな経験を通して成長していく．その中で，学生が，指導者から「積極性がない」との指摘を受けることがある．これは，臨床実習評価において，しばしば問題視される点であり，積極性が乏しいことで，実習が成立しなくなることもある．そこでわれわれは，理学療法臨床実習評価において，指導者が，何をもって「実習生の積極性」を規定しているかについて調査し，その回答の一つに，「質問すること」があがったことを，第 50 回近畿理学療法学術大会にて報告した[2)]．

近年，効果的な教育手段として，Active learning（能動的学習）がさまざまな教育場面で用いられている．本邦の理学療法士協会においても，実習で，Active learning の習慣を引き出すことが推奨されている[3)]．そのため指導者は，学生が Active learning が出来ているのか出来ていないのかを判別し，必要な支援を行うことが重要となる．判断する基準の一つに，学生自身の実習に積極的に取り組もうとする姿勢の有無があり，具体的には，学生は指導者に質問しているか，ということが挙げられる．質問ができる学生とそうでない学生での心理的要因の相違点が分かれば，学生の効果的な Active learning を支援する一助になると考える．

本研究の目的は，実習で，積極的に質問ができた学生とそうでなかった学生の心理状況を調査し，学生自身の実習に積極的に取り組もうとする姿勢を支援するために必要な方略を検討することとした．

方　法

＜対象＞　平成 24～26 年度に長期実習(8 週間)に参加した大阪河﨑リハビリテーション大学（以下，本学)の学生 200 名(男性 152 名，女性 48 名)であった．

＜調査＞　本研究用に作成した調査票を用いた．調査票の構成 は，Q1：『積極的に質問することができたか』，Q2：実習中の心理状況とした．心理状況に関する質問項目では，筆者らが臨床教育経験から予想される 6 項目とした．その内訳は，1）不安感でいっぱいであったか，2）緊張していたか，3）辛かったか，4）楽しかったか，5）やり甲斐があったか，6）指導者に苦手意識があったか，とした．尺度として，それぞれ，「あてはまる（常にあった)」から「あてはまらない（なかった)」までの 3 件法での回答とした．

＜調査日＞　実習終了後初日登校日に大学内で実施した．

＜解析＞　積極的に質問できたか否かと心理状況との関係をみるために，質問（できた・できなかった）×各項目（あてはまる･あてはまらない)にて，χ^2独立性の検定を行った．なお，有意水準を 5%とし，解析には，エクセル統計 Statcel3 を用いた．さらに，検定の結果を受け，独立性が棄却された項目について，積極的に質問することができたと回答した学生とそうでない学生の心理状況を比較・分析した．

本研究は，本学倫理委員会規則に従うもので（承認番号 OKRU2211），調査にあたっては，対象者に本研究の主旨を口頭および紙面で説明し，研究参加の同意を得た．

結　果

Q1：『積極的に質問することができたか』に対し，「できた」と回答した学生は 133 名(全体の 66.5%)，「どちらでもない」と回答した学生が 40 名（20.0%)，「できなかった」と回答した学生が 27 名（13.5%）であった．

心理状況の独立性の検定の結果，独立性が棄却された項目は，1）不安感でいっぱいであったか，3）辛かったか，4）楽しかったか，5）やり甲斐があったか，の 4 項目であった．

「積極的に質問することができたか」の問いに対し，「できた」と回答した対象者で，不安感でいっぱいであった，辛かった，楽しかった，やり甲斐があった，と回答したのは，それぞれ，61.7%，57.1%，84.2%，96.2%であった（表 1)．

一方，「できなかった」と回答した対象者で，不安感でいっぱいであった，辛かった，楽しかった，やり甲斐があった，と回答したのは，それぞれ，96.3%，92.6%，40.7%，51.9%で

あった（表2）.

表1．積極的に質問ができた学生の心理状況（n =133）

	度数	割合
不安だった	82	61.7%
辛かった	76	57.1%
楽しかった	112	84.2%
やり甲斐があった	128	96.2%

表2．積極的に質問ができた学生の心理状況（n =27）

	度数	割合
不安だった	26	96.3%
辛かった	25	92.6%
楽しかった	11	40.7%
やり甲斐があった	14	51.9%

考　察

1．積極的に質問することと関係性が低い心理的要因

検定の結果，Q1：『積極的に質問することができたか』と関連がなかった心理状況は，2）緊張していたか，6）指導者に苦手意識があったか，の2つの心理状況であった．教員は，実習期間中に実施する実習巡回訪問での学生面談にて，積極的に質問できない理由を聞き出すことがある．そのなかで，学生から，「緊張しているから」という理由が返ってくることを経験することがある．そのため，調査前では，学生は，緊張や指導者に対する苦手意識によって指導者に質問することが困難になるのではないかと予測していたが，今回の調査では，そうではない結果が得られた．これは，緊張や指導者に対する苦手意識があって質問しづらい状況よりも，担当患者に対する理学療法の興味が勝ったためではないかと考える．

2．積極的に質問できた・できなかったに関係する心理的要因

『積極的に質問することができたか』の問いに対し，「できた」と回答した対象者の中で，「やり甲斐があった」と回答した割合は96.2%で，積極的に質問ができた学生において最も割合の多かった心理状況であった．これは，学生が実習生として，患者に対する指導者の対応や治療効果を目の当たりにしたこと，重なる指導内容を理解し自身が実践できたこと等が動機となって，自信に繋がり，それがやり甲斐となって，積極的な質問ができたのではないかと考える．

一方，「積極的に質問することができなかった」と回答した学生で，不安感でいっぱいであったと回答したのは 96.3%，辛かったと回答したのが92.6%であった．これらは，積極的に質問できなかった学生において非常に割合の多かった心理状況であった．また，「やり甲斐があった」と回答した学生が51.9%もいたにもかかわらず，質問できていないことが明らかになった．つまり，学生は，（積極的に質問することに関係すると考えられる）やり甲斐を感じていても，不安や辛さが勝ると，質問できなくなることが伺える．

3．積極的な取り組みを支援するために必要な方略

以上のことから，学生自身の実習に積極的に取り組もうとする姿勢を支援するために必要な方略として，学生の不安や辛さといったネガティブな心理的要因に対する評価や支援が必要であることがわかった．そして，学生自身がこれらの状況にどのような対策や取り組みが必要かについて考え，解決の糸口を探れるように支援をすることが重要と考えられた．

4. 残された課題

積極的に質問することを推進すると考えられる実習中に学生が考える（思う）やり甲斐とは何なのか，どのような経験でやり甲斐を感じるのか（やり甲斐と思うのか）を調査することが求められる．今後の課題としたい．

また，積極的に質問することに支障を来すと考えられる不安や辛さが起こる原因を探ることが求められる．この原因は，学生個々人で異なる要因が影響していることは容易に予測できる．したがって，学生が抱く不安や辛さに対し，実習前に起因するものに対しては，教員の支援が必要となる．また，実習開始以降に起因する原因に対しては，指導者からの情報を参考に，指導者の協力を得ながら支援することが望ましいと考える．

さいごに

平成20年に独立行政法人日本学生支援機構が行った「大学，短期大学，高等専門学校における学生支援の取り組み状況に関する調査」にて，特に増加していると思われる相談内容に，「対人関係」が最も多かったことが報告された[4]．今後は，対人関係を含む情意領域[5]の改善に向けた支援も必要な学生がますます増えてくることを念頭に置いて，学生指導に携わらなければならないかもしれない．

今回の結果は，調査対象者となった学生個々人のパーソナリティーにおける相違，人間性の未熟さ等の交絡因子の影響も無視できないが，指導する立場のわれわれにとって，現代の学生のネガティブな心理的要因に対する注意深い配慮が必要であることを意味するものでもあると考えられる．

文　献

1）医療六法編集委員会編：理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則．平成22年度　医療六法，2010，p1599

2）藤平保茂・他：臨床実習指導者が実習生の積極性を規定する因子について－自由記載による調査表から－．第50回近畿理学療法学術大会誌　第40号CD-ROM集，2011

3）社団法人日本理学療法士協会：臨床実習教育の手引き　第5版2009，p8

4）大貫賢一：メンタルヘルス研究協議会　平成21年度報告書，p1

5）社団法人理学療法士協会：臨床実習教育の手引き　第5版．2009，p20